

皆さん、あけましておめでとうございます。

比較的、穏やかな天候に恵まれ、よいお正月を迎えることができたと思います。『一年の計は、元旦にあり』とありますが、新年に当たって新たな抱負を持つことは、平凡な生活の繰り返しにけじめをつけるという意味では、人間の素晴らしい知恵であると思います。我々の祖先は、元日を迎えると、みな一つずつ歳を加えて、みんなが歳をとるから「めでたし」とお祝いの儀式を行ってきました。これが、いわゆる「数え年」であり、正月は、国民の連帯感を育ててきた行事のひとつであろうと思います。節目に当たって新しいスタートを切るのは大切なことです。3 学期を迎えて自分の怠惰な心を戒め、目標を定めて新しい気持ちで臨んでほしい。皆さんが年の初めに当たって、「今年こそは、これを」と思った志は何だったでしょうか。

2 学期の終業式で、人は師走になると『歳月は人を待たず』という言葉の重みを実感するという話をしました。年が明けたら明けたで、『1 月は行く、2 月は逃げる、3 月は去る』という言葉が待ち受けています。節目に当たって、改めて時の流れについて思いを馳せてもらいたいと思います。

皆さんの学校生活を見てみると、2 学期後半、進路が確定した3 年生の中には、残念ながら安心して気の緩んだ生徒が若干見受けられました。また、下級生にも、目的意識が低く、ただなんとなく日々を送っている生徒や、自分を律することのできなかつた生徒が見られました。もちろん、元気に登校できているということはそれだけで素晴らしいことなのですが、学校の校風や雰囲気は一人一人の心がけによって作られます。私ひとりくらい、というような甘えが、全体の緩みをどんどん作り上げていってしまいます。どうか未来の北高生である今の中学生以下の人を選んでもらえるような、凛とした逞しい学校を皆さんの力で作ってください。

今日は、年頭に当たって、私の好きな『茨木のり子』の詩を、皆さんに贈ります。国語の教科書にも載っていて、かつて教えたことがある詩です。

『自分の感受性くらい』

ぱさぱさに乾いてゆく心を
ひとのせいにはするな
みずから水やりを怠っておいて

気難しくなってきたのを
友人のせいにはするな
しなやかさを失ったのはどちらなのか

苛立つのを
近親のせいにはするな
なにかも下手だったのはわたくし

初心消えかかるのを
暮らしのせいにはするな
そもそもが ひよわな志にすぎなかった

駄目なことの一切を
時代のせいにはするな
わずかに光る尊厳の放棄

自分の感受性くらい
自分で守れ
ばかものよ

いろいろなものに寄り掛かって、責任を回避してはいけないという強いメッセージが感じられます。一言で言うなら「人のせいにするな」。何かのせいで自分の感受性が傷んでしまうような被害者になるなということでしょうか。

人は、つい自分の責任を回避して周りの責任にしてしまうことがあります。それが一番楽だからです。「自分の感受性くらい 自分で守れ ばかものよ」というメッセージは、そういう自分に対して、背筋が伸びるような強さがあります。「そもそもが ひよわな志にすぎなかった」というところも耳が痛いメッセージです。

志という字は、心が目標に向かって進みゆく様が語源ですが、十に一を書き、下に心を書くことから、10ある心の一つに定める、散らばっている心の一つにまとめるとも言われることがあります。人間、「志」が低ければ、怠惰に流れます。「自分を高めたい。」「社会に貢献したい。」といった「志」を持って努力する人がいれば、周りはその人に共感して、その人の力になりたい、力を貸したいと思うのです。つまりは、それがリーダーシップとなります。リーダーには、私利私欲があってはならない。世のため人のためになりたいと努力する人が社会のリーダーとなりうるのです。また、他人に対してあれこれ強制する者は、決してリーダーにはなれない。例えば、部活動のキャプテンは、人の数倍努力してはじめて周りが共感し、共に頑張ろうということになる。「志」を持って、それを達成するために、キャプテン自らが努力することでチームは同じ方向を向き、それがリーダーシップとなりうるのです。さらに、「志」を達成するためには、やみくもに努力するのではなく、考えを巡らし、知恵と工夫で正しい方向を向かなくてはならなりません。社会に出てからリーダーとなるためには、やはり「学び」ということが重要な要素になってきます。

「青雲の志」という言葉があります。青雲とは雲の上の青い空を意味し、徳を磨いて、立派な人物になろうとする心を意味します。皆がそれぞれの志を持ってほしい。特に3年生の諸君は、ドラマ「坂の上の雲」のエンドロールに使われていた「Stand Alone」の歌詞にあるように『一朵の雲を目指し、凜として旅立つ』ことを願っています。先達が追い求めたものを諸君が受け継げるように、日々の真摯な取り組みをお願いして式辞とします。